

日本語の「～する外（ほか）ない」に対応する朝鮮語の表現について —通時論的視点からの考察—

門脇誠一

1. はじめに

日本語の「動詞連体形＋外（ほか）ない」に対応する朝鮮語の表現はと聞かれたら、「動詞未来連体形（ㄷ/을）＋수 밖에 없다」と答えるのが普通であろう。しかし、時間を遡って古い資料を調べてみると、実は、これ以外にも ㄷ/을 밖에 없다、ㄷ/을 밖에 수(가) 없다などの表現があったことがわかる。

本論は、これら3つの表現を中心にして、通時論的視点から見た場合どのようなことが言えるかを考察するものである。

2. 現代朝鮮語と現代日本語の動詞の用法

本論に入る前に、本論に関連のある基本的な文法事項について整理しておきたい。

2.1 主に動詞を中心にして見ると、日本語の動詞と朝鮮語の動詞の大きな違いの一つに、前者の場合は、動詞の連体形と終止形が同じ形になっているのに対して、後者の場合は、原則として動詞の連体形と終止形が異なっている点が見られる。

例

		終止形	連体形
日本語	現在	今 リンゴを食べている。	今食べているリンゴ
	過去	昨日 リンゴを食べた。	昨日食べたリンゴ
朝鮮語	現在	지금 사과를 먹고 있다.	지금 먹고 있는 사과
	過去	어제 사과를 먹었다.	어제 먹은 사과

但し、예「時」という語の場合は 例えば、「食べる時」먹을 때 「食べた時」먹었을 때 という具合に 過去の場合は、過去の連体形ではなく、終止形に用いられる形を使用するのが原則である。ちなみに、「예」と類似の意味を表す 적 「時」という形式名詞の場合は예とほとんど同じように用いられるが、過去の連体形が使用される場合もあり、その場合は 먹은 적이 있다「食べたことがある」というように経験を表すという特徴がある。¹

¹ 以前、慶尚道の大邱にいたとき、「日本語を勉強した学生」というところを 過去連体

2.2

更に、両言語の違いとしてあげられるものに、名詞（形式名詞も含む）の中には、日本語では動詞の連体形に接続するものが、朝鮮語では動詞の語幹に기를付けて名詞化したうえで、接続するものがあるということである。

代表的なものとして、전「前」때문「ため・故（理由）」²とをあげることができる。

- ① 食事する前に手を洗いなさい。 식사하기 전에 손을 씻어라.
- ② お金がないため（ので）買えません。 돈이 없기 때문에 못 삽니다.
- ③ 君が努力したから成功したのだ。 네가 노력했기 때문에 성공한 것이다.

なお、「以来」「以後」という語は、日本語においては、「～して以来」「～して以後」と連用テ形に接続するのに対して、朝鮮語においては、「ㄴ/은 이래」「ㄴ/은 이후」と過去連体形に接続するという違いもある。さらに、「同時」という語は、日本語で「～すると同時に」となるところを、「～는 동시에」のように現在連体形を用いるという違いもある。

なお、기를介して動詞に接続するものには外に、일쭉(다)（～するのが常だ）마련(이다)（～するものだ）나름(이다)（～次第だ）などの形式名詞もあるが、これらは「名詞述語文」の構成要素をなすものである。ちなみに、때문(이다)は（～するからだ）という「連用句述語文」の構成要素になるものである。

加藤重弘『日本語文法入門ハンドブック』参照

3. 通時的考察

2.2. で取り上げた 때문에、전에 が用言に接続する際に、現代朝鮮語ではなぜ기를介するのかという疑問が生じるが、果して、これらがもともと기를介して用言に接続していたのかどうかについて調べてみよう。そのうえで、表題にあげた問題を検討することにする。

3. 1. まず、明治・大正時代に刊行された資料から見ることにしよう。

形の 공부한 を使わずに、 일어를 공부했는 학생이라는のを聞いて驚いたことを覚えている。

² 기 때문에 全体で「～するから、～なので」という理由を表し、日本語の接続助詞に類似した働きをするものであるが、때문自体 は朝鮮語では形式名詞と考えられているものである。

[資料1] 『韓語通』明治42年

前間恭作氏による著書で、中期朝鮮語と現代朝鮮語とを研究する上で、その両言語を結びつける研究資料として欠かせないものである。

本資料には問題の 때문에、전에 について興味深い説明と例文が載っている。

A. 때문에 「から、ので」 「理由」を表すもの

④ 外国へ沢山出るから直が上がったのです

타국으로 만히 나가는 새문에 잠시 올랐소 p183

また、p276 には、形容詞の例があげられ、次のような説明も加えられている。

「連体法に「고로」(故に)「외담으로」(訳で)「새문에」(為めに)の語を加えて如上の義を表はすこと亦動詞と異ならず。」

⑤ 人間が正直だからだまされたのです

사람이 착한고로 속은 거시오

⑥ 馬鹿だから分らないのです

못난 외담으로 모르는 거시오

⑦ 余り気の毒だったから言わなかったのです

너무 미안하기 석문에 그말 못했소

例文⑤⑥は 때문에 と同様「理由」を表すもの(形式名詞「故」+로、形式名詞「外談」+으로)であるが、いずれも用言の連体形に接続している。

それに対して、最後の⑦の例文は現代朝鮮語と同様、기를介して接続する形であるが、기 석문에の右横に、註として、「時として不定法をも用ゆ」と書かれているのが注目される。この説明は、기 석문을を指して言われているものである。つまり、④の例を見てもわかる通り、『韓語通』が出版された明治42年当時も、この構文は、いわゆる連体形につく形が一般的であったが、기가付く形も使われ出していたということが読み取れるのである。

B. 전 「時」

[資料1] 『韓語通』

一方、전 については、p55 の「語辞：名詞数詞語彙」の個所に、전 前、する前に 하기 전에 とあり、例文としても、次の一例だけが載せられている。

⑧ 私の来る前から御いででしたか

나 오기 전버텀 계셨소 p120

ただ、そこにあげられている註は非常に興味深いものである。

「此処にあげたる名詞は何れも連体法の動詞の後に付せらるるといふまでもなしと雖も、只(前) 전 の一名詞は例外として常に不定法の後にのみ添ゆ」

なお、ここにあげられている名詞を参考までに以下にあげておくことにする。

앞 まえ 뒤 後 안 内 맞 外 속 内部 웃 上 아리 下 가운데 中
전 前 후 後 동안 間 즈음 頃、あたり 이리 以来 이후 以後 다음
次 중 中 되신 代り 되문 為め 爲め 가답 訳

上の註は、言い換えると、動詞に接続する場合、전 前だけは 例外として「
のついた形に接続しているが、残りのものはすべて連体形に接続する」というこ
とになる。

しかも、その中には 밖「外」も含まれていることがわかる。

[資料2]『日韓通話』 国分国夫編輯 国分象太郎校正 柳芯根・朴斎尚閑

この資料は明治26年に初版が、明治28年(再販)、32年(三版)、37年
(四版)、38年(五版)、更に41年に増版六版まで出版されているものである。
校正を担当している国分象太郎氏は朝鮮総督府官僚で一等通訳官も務めた人物
だということ、しかも、二人の朝鮮人の校閲者がいることから、内容はかなり信
用できるものではないかと思われる。

A. 때문에가用言に接続する例なし。

B. 전에

⑨ 太陽ノ昇ラヌマニ 早ク 起キサイ

히가 돛기 전에 일즉 니러나시요 p16

⑩ 我国^テ 師範学校設立前^ニ アノ人ハ日本^ニ往キ 教授方ヲ 学^テキト 云ヒマス
우리나라에 사범학교 설치하기 전에 그가 일본가서 교법을 배와
왔다 하옵디다 増補 p10

⑪ 마^가 法律改正前^テ스라 콜레^가ノ法ヲ 梟首ト為シ 或ハ 流刑ニ処スルヲ^デ스
아직 법률 곳치기 전이넛까 이왕 법으로 효슈도하며 혹 귀향도
보넛다 호오 増補 p20

ここに上がっている例は例外なく 기を介して接続していることがわかる。

[資料3]『日本人之朝鮮語独学』 朴重華

この本は朝鮮人自ら書いたもので、初版は大正12年、大正14年には第3版、
さらに昭和4年には第4版まで出版され、かなり広く多くの人に利用されたこ

とがわかる。

A. 때문에

- ⑫ 농사를 하는 재문에 껍 밧부오 p163

農事ヲスル為ニ 非常ニ 忙シテス

- ⑬ 알은 재문에 몸이 약하오

患ッテ為ニ 体が 弱テス

- ⑭ 잘 더러워지는 재문에 물드리오

汚レル 為ニ 染マス

- ⑮ 분주한 재문에 못갓소

忙シ 為ニ 往ケカッタテス

- ⑯ 공부 안키 재문에 락제하오

勉強シカッタ 為ニ 落第マス

- ⑰ 나는 더위를 타는 재문에 시방이라도 낮에는 더워서 견딜 수 업소 p193

私ハ 暑カリ性テ 今デモ 昼ハ 暑クテ 堪リマセン

- ⑱ 실인은 오래동안 고국을 못본 재문에 금번에는 근친도 해야만 되겟고 p269

家内ハ 永イ間 国ノ方ヘ 行ッテ 見カッタ為ニ 今度ハ帰省モ センニヤナラン

- ⑲ 좀 늦게 온 재문에 연소한 범위가 껍 넓아습니다 p296

少シ 遅ク 来タ為ニ 類焼シテ 範圍ガ 非常ニ 広カッタテス

- ⑳ 이것은 월료와 공가가 비싼 재문에 이 갑세 팔어도 이(리)가 업습니다 p303

之ハ 原料ト 工賃ガ 高テスカラ 此ノ値テ 売ッテモ 儲ハアリマセン

- ㉑ 그것은 나중에 맞은 돈을 환급할 제의 징거 삼기 재문이올시다 p 373

其ハ 後ニ預ッテ 金ヲ払戻ス時ノ 証拠ニスル為メテス

B. 전에가 用言に接続する例はなし。³

³ 『韓語正規』近藤信一 (明治39年) という文法書があるが、そこには次のような例文が一例だけあげられている。

밥을 먹을 전에는 돛치요마는 먹은 후에는 실소

飯を食べる前には宜しけれども食べた後は嫌です p216

この資料には、전에가 動詞の連体形に例は上にあげた一例のみで、기 전에의 形は見えない。又、때문에가 用言に接続する例も、기 때문에의 形は上がっていない。それにもかか

A. にあげた例のうち、⑩⑪を除いて他はすべて用言の連体形（現在・未来・過去）に接続しているものである。

大正12年の初版においても、⑩⑪の例が「기」を介して接続していたのかどうかについてはわからないが、昭和4年当時は、未だに用言の連体形に接続する形が広く使われていたことがわかるのである。

以上、[資料1][資料2][資料3]の例からわかることは、明治から、大正、昭和初期までは、「理由」を表す 때문에 は動詞の連体形に接続するのが一般的であったが、「기」を伴うこともまれに現れることがあったこと。また、「時」전 の場合は、『韓語正規』にあげた一例を除いて、例外なく「기」を伴って現れているということである。⁴

3. 2

それでは、次に江戸時代から明治時代までに現れた資料を通して考察してみることにして。利用する資料は、『交隣須知』『隣語大方』さらには『捷解新語』などである。

[資料4]『交隣須知』

ここで使用する『交隣須知』は明治14年版、明治16年版（白石氏蔵版）、アストン本の3冊である。以下それぞれI. II. III. の記号を使用することにする。

なお、資料I. II. III. において、対応する例文がある場合だけ載せることにする。また、対応する例文と考えられるものでも、大幅に内容に変更があるものは

ならず、この例をあげたのは、実は校閲者として金沢庄三郎氏の名前があり、しかも、本文を見ると他の学習書には見られない、漢語及び若干の朝鮮語に長音表示が見られるほか、文法上の重要な指摘もある。これらは明らかに校閲者の影響によるものと考えられ、あげた例文も、単なる母語による言語干渉とは片付けられないと思われるからである。

⁴ 최현배 『우리말본』 p223 に때문의例文として나라가 가난함은 국민이 게으른 때문이다. (国が貧しいのは国民が怠け者だからだ) という例文があがっている。게으른は게으르다という形容詞の連体形である。また、本文のp218にも次のような文がある。
움직씨에 영향을 미치는 깊은 관계가 있는 때문이다. (動詞に影響を及ぼす深い関係があるからだ)

ところで、この本は初版が1929年（昭和4年）であるが、1971年（昭和46年）に改訂4版が出ているにも拘わらず、訂正されていないということは第4版が出版された当時もまだこの連体形に接続する形が使用されていたということになる。

載せないことにする。

A. 전에

- ② I. 1. 5a 天動：蚕ノ繭ツクラ前ニ カミリガスレハ 皆 スリマス
누네 올니지 아닌 전에 텃동허면 다 브리옵네
- ②' II. 1. 4a 蚕ノ上ガル前ニ 雷ガ 鳴ハ 皆捨リマス
누에 올니기 전에 텃동허면 다 브리옵네다
- ②" III. 1. 05a 카이ノ 마츭クラ前ニ カミリガ스레ハ 皆 捨リマスル
누에 올니지 아닌 전에 텃동허면 다 브리옵니

- ③ I. 2. 48b 病ガ 重ラ前ニ 養生ヲサレマセヨ
병이 중치 아닌 전에 요접호옵쇼셔
- ③' II. 2. 35b 病ガ 重ラ前ニ 養生ヲサレマセヨ
병이 중치 아닌 전에 요접호옵쇼셔

以上、少ない例ではあるが、まず、②②'を見ると、I. で連体形に接続する形が II. では、기를介する形に訂正されていることがわかる。但し、③'の例では、否定形ではあるが、連体形に接続する形が現れている。III. の例は一例しかないが、I. と同じである。⁵

[資料5]『隣語大方』

なお、ここで使用する資料は、『訂正隣語大方』(明治15年)と『アストン本』である。以下、それぞれに対して I、II の記号で表すこととする。

- ④ I. 4. 5a 간스로 온 사람이 맞튼 일을 준스를 못헌 전에
公用デマイッタモガ アヅカッタ事ノ事ズミニラヌ 前ニ
- ④' II. 1. 10a 幹事로 온 사람이 맞다운 일을竣事を 못한 전의

⁵ 『訂正増補 独習韓語大成』伊藤伊吉(明治43年)という文法書があるが、p75に興味深い例が載っている。

니러나기 전에 오나라 起キコトノ前ニ 来イ
해가 돛기 전에 썩나갯소 日ガ昇ルトノ前ニ 出發マシヨ
저무기 전에(저물 전에) 드러 가갯소 暮ル前ニ 行キ着ケシヨ

전에に接続する例文は全部で上の3例であるが、最初の2例は 기を介して接続しているものである。興味深いのは、最後の例文において、わざわざ括弧の中に連体形に接続する例をあげていることである。しかも、日本語訳にもその違いが表れている。つまり、最後の例の日本語が動詞の連体形に接続する形で訳されたのは明らかに意識的に行われたものと推測される。このことから、当時기의接続する形が優勢であったが、未だ連体形に接続する形も使用されており、いわば揺れの状態を示していたのではないかと思われるのである。

- ゴヨデキタ モカ ウケタリノ事ノ コスニ ナラヌエニ
- ㉔ I. 4.9b 아르시드시 인공하리 ㅎ옵싸가 미쳐 못올나간 전에
ゴゾソジノ通り 公用ニテ 下来致シマシテ マダノホリユヌ 前ニ
- ㉔' II. 1.20b 아르시드시 因公下来ㅎ옵다가 밋쳐 못올나간 전의
ゴゾソジノトリ コユニツイテ 下テイルマシテ イダノホリヌ前ニ
- ㉕ I. 6.3b 이 기별 오기 전에
此左右ノ マイヌ 前ニ
- ㉕' II. 3.6b 이 기별 오지 아닌 전의
コノタヨリノ 마이ヌ マニ
- ㉖ I. 7.9a 일이 그릇 되지 아는 전에
事ノソソジニ ナヌ 前ニ
- ㉖' II. 4.18a 일이 그릇 되지 아니흔 전의
事ノ アシナラヌエニ

これらの例を見ると、㉕ I.を除いてすべて連体形に接続していることがわかる。

つまり、この形に関して言えば、アストン本のほうが古い形を反映しているのではないと思われる。

[資料 6] 『捷解新語』

ここで利用する資料は『原刊本』と『重刊本』である。以下それぞれ I. II. の記号を使用することにする

A. 전의

- ㉔' II. 6.12a 御せんを御ひきなされぬさきに たちまするにより
상을 안지 아닌 전의 니려나오니
- ㉕ I. 6.13a よのあけんうちに
밤이 붉디 아닌 전의
- ㉕' II. 6.13a よのあけませんうちに
밤이 붉지 아닌 전의
- ㉖ I. 8.4a しんすよりおしられんさきに
信徒피셔 니르시디 아닌 전의
- ㉖' II. 8.6a さんしよりおおせられぬさきに
三使피셔 니르시지 아닌 전의
- ㉗ I. 10.15a とねき御くたらんさき
東葉御不下前

㉑' II. 10 中 8b どうらい御くたりまえ

東萊 노력오신 전의

以上、『捷解新語』について見てきたが、I. II. ともに動詞連体形に接続する形しか見当たらないことがわかる。⁶

4. 前置きが少し長くなったようだが、いよいよ表題にあげた問題について考察することにしよう。

上述の説明から、때문에、전에 いずれも古くは用言の連体形に接続していたことが確認できた。それでは、なぜこれらが用言の連体形ではなく、用言語幹に기를付けて名詞形にしたうえで接続することになったのかが問題になるが、ここでは上述のことを指摘するだけに留めておきたい。

4. 1.

表題にあげた3つの形を整理すると、動詞連体形に밖(에 없다)が直接接続するものと、動詞連体形と밖(에 없다)との間に ㅅが入るものとに分けられ、さらに、前者は、動詞連体形に後続する밖에 と 없다との間にㅅ(가)入るものと入らないものとに分けられる。

I. a. 動詞連体形+ 밖에 없다

b. 動詞連体形+ 밖에 ㅅ(가) 없다

II. 動詞連体形+ ㅅ 밖에 없다

以下、これらの形がどのような形で現れていたかを調べてみよう。

4. 2.

[資料1]『韓語通』 前間恭作 明治42年

巻頭の「緒言」を見ると、刊行は明治42年になっているが、「明治35年予の再び韓国に入り、「此の書の稿を起ぬ。後二年全篇成り」とあることから、草稿は実は明治37年には出来ていたことがわかる。ちなみに、本書を刊行するに当たり、一時断念しかけていたが、来韓した白鳥博士の強い勧めがあつて刊行することに決めたとある。

⁶ 明治大正時代の出版物を見ると、現代日本語で「～する前に」という表現が「～しない前に」と否定表現で出てくる例が意外に多いことがわかるが、それ以前にも否定表現を使うことが多かったことがわかる。

本書に載っている例は以下のとおりである。

- ③② 前に取極めた通りにするよりは仕様がありませぬ p117

아왕 작명흔디로 흘 맞기 슈 업소

- ③③ 面倒でもしなければならぬ p282

괴로와도 흘 맞게 슈 업서

[資料1]では、二例ともに、4. 1. にあげた I. b. の形で、ちょうど日本語の「～する外にすべ（仕様）がない」という意味に対応していることがわかる。

[資料2]『韓語文典』 高橋亨 明治42年

巻頭の「自序」を見ると、明治37年から6年間朝鮮語の学習を通して、「韓語法の組織体を捕捉し得たるが如きを覚ゆ」ほど朝鮮語に対して、自信を獲得したことがわかる。

しかも、本書を刊行するに際しては、「五六の教育ある韓人にも質して略成案となし」とあることからネイティブスピーカーのチェックを受けていたこともわかる。なお、[資料1]と刊行年度が同じであることから、『韓語通』の刊行についての話は周囲から聞いていた可能性はあるが、実際は事前に見る機会はなかったのではないかとと思われる。

本書P145に次のような記述がある。

義務法：「스키」「시키바나」 という叙法。例として ㄷ 만키-, ㄷ 맞게(수가) 업소, 不可不(不得不) --야 히다 の3つの形があげられており、さらに、p146に ㄷ 맞게(수가) 업다の例文があがっている。

- ③④ 갈 맞게(수가) 업소 行키바나

この説明から読み取れることは、一般的には 갈 맞게 업소 と言うのが普通だが、갈 맞게 수가 업소と間に수가を入れて言うことも可能だと言うことではないかと思われる。

[資料1]と[資料2]を比較してわかることは、いずれも4. 1. にあげた I. の型、つまり動詞の連体形に밖에が直接接続しているということである。興味深いのは、[資料1]では、수가括弧付きでない形で載っているのに対して、ネイティブスピーカーのチェックまで受けた[資料2]では、括弧付きで表記されている点である。二つの形が当時揺れの状態にあったということがわかるが、いずれ

にしても重要なのは、動詞連体形に밖에가直接結合しているという点である。⁷

ちなみに、この表現が日本語の「～する外ない」「～する外手段がない（仕方がない）」という表現に類似していることも興味深い。

[資料 3] 『交隣須知』

ここで使用する『交隣須知』は、明治14年版と明治16年版(白石氏蔵版)とアストン本の3冊である。

それぞれ I. II. III. の記号を使用する。

- ③⑤ I. 1. 21b 江 : 江가 ｺﾛﾀﾅｺﾘ 往ｸ外ハ ｺﾞザﾘﾏｽ
강이 어러쓰니 오호로 거리갈 맞게 업스외다
江가凍ﾀﾗ 上ヲ 歩テ 往ｸ外ハｲ
- ③⑤' II. 1. 16b 강이 어러쓰니 빙등홀 맞게 업다
江가凍ﾀﾗ 上ヲ 歩テ 往ｸ外ハｲ
- ③⑤" III. [0245] 강이 어러니 우홀 거르갈 맞근 업스외
江가 ｺﾌｯﾀﾅｺﾘ 上ヲ 歩テ 往ｸ外ハ ｺﾛﾘﾏｽ
- ③⑤''' III. [會話 a/30] 강이 어러쓰니 우의로 거리갈 바세 슈가 업쇼
- ③⑥ I. 2. 37b 陸路 : ㄴㄴ로 가매 짐을낭은 ㅂㅅ ㅅㅅㅅㅅ의게 맞길 ㅅㅅ게 업스외
ｶｷｶ往ｸ故 荷ハ 船ノ人ニ アヅｸ外ハ アﾘﾏｽ
- ③⑥' II. 2. 27b ㄴㄴ로 가매 짐을낭은 ㅂㅅ ㅅㅅㅅㅅ의게 맞길 ㅅㅅ게 업스외다
陸路ｶ往ｸ故 荷ハ 船ノ人ニ 預ｸ外ハ アﾘﾏｽ
- ③⑥" III. 會話 b. 57 陸路 : ㅂㅅ길로 가매 ㅅㅅㅅㅅ의 맞길 맞근 업스외
- ③⑦ I. 2. 56a 隨 : ㅅㅅ러 가려허되 다리 압퍼 ㅅㅅ러질 맞게 업슴네
ツイユウトｽﾄﾓ 足가 痛ムニヨリ オクレル外ハ ｺﾞザﾗｽ
- ③⑦' II. 2. 40b ㅅㅅ러 가려허되 다리 압퍼 ㅅㅅ러질 맞게 업슴네다
就テ ヲウトｽﾄﾓ 足가 痛ムﾗ 後レル 外ハ ｺﾞザﾗｽ
- ③⑧ III. [0452] 兄 : 형임의 말을 좃출 맞기 업슴넌
アニﾅノ 言ニ シｶﾞウ 外ハ ｺﾛﾘﾏｽ
- ③⑨ I. 3. 37b 乘 : ㅂ고 갈거시 업서 오늘도 ㅅㅅ물 맞케 업스오
リテ 往ｸモノｶﾞナケ今日モ トマル外ハ ｺﾞザﾗｽ

⁷ 『연세 현대한국어사전』의 밖의個所に次のような例文がある。

자식이 저렇게 속을 썩이니 늙을밖에. 子供にあんなにも氣をもまされるのでは年をとるしか。

- ㉔' II. 3. 26a ㅌ고 ㄱ ㅌ시 ㅌ스니 ㅌ물 ㅌ케 ㅌ스오
乗テ往ク物がナケ 泊ル外ハ コザラヌ
- ㉕ III. 4. 6a 捕 : ㅌ어다가 ㅌ가의 ㅌ홀 ㅌ근 ㅌ습니
トエテ 公儀ニ告ル 外ハコザリマヌ
- ㉖ I. 4. 13b 妄 : ㅌ녕인듯 ㅌ되 ㅌ근 ㅌ름의 ㅌ이기에 ㅌ를 ㅌ게 ㅌ거든
ホーチャクノヤウニアレトモ 年ヨリノ ハシニツキ キヨ外ハ ナイ
- ㉗ I. 4. 8b 憫 : ㅌ망혈지라도 ㅌ혈 ㅌ게 ㅌ스오
迷惑ト云フテモ ウケモツカハ コザリマヌ
- ㉘" III. 4. 15b 訴 ㅌ아서 ㅌ보던 ㅌ을 ㅌ슬 ㅌ근 ㅌ고니
ウツタヘ ハジカイトコヲ スグ外ハナイ
- ㉙ I. 4. 12b 譏 ㅌ룡하던 ㅌ데 ㅌ음허니 ㅌ슬 ㅌ게 ㅌ습네
雜談シカタハラカテ ケンクワシテ 笑ウ外ハ コザラヌ
- ㉙" III. 4. 17a 譏 ㅌ룡하던 ㅌ데 ㅌ름하니 ㅌ슬 ㅌ기 ㅌ나니
ゾウタン カタハシカラ ケンクハシテ 笑ウ外ハコザヌ
- ㉚ I. 4. 20b 不可不 : ㅌ가ㅌ 할 ㅌ겐 ㅌ습느니
イヤデモ スルカハ コザリマヌ
- ㉚' II. 4. 11b ㅌ가ㅌ 할 ㅌ겐 ㅌ습느니
否デモ スル外ハコザリマヌ
- ㉚" III. 4. 28a 不可不 : ㅌ가ㅌ ㅌ ㅌ근 ㅌ습느니
イヤデモ スル 外ハコザリマヌ
- ㉛ I. 4. 21b 耐 : ㅌ디여 ㅌ ㅌ겐 ㅌ거든
耐ヘテシル 外ハナイ
- ㉛' II. 4. 12b ㅌ디여 ㅌ ㅌ겐 ㅌ거든
耐ヘテ見ル外ハナイ
- ㉛" III. 4. 30a 耐 : ㅌ디여 ㅌ ㅌ근 ㅌ고든
コタエテ 見ルヨリ 外ハ コザラヌ
- ㉛" III. 4. 43b 棄 : ㅌ려 ㅌ엇습거니와 ㅌ여 ㅌ ㅌ근 ㅌ습니
ステテキヤシタレトモ 出シ ツカウ外ハコザリマヌ

『交隣須知』의 例을 見ると、I. II. III. ㅌずれ의 文獻においても、例外なく動詞連体形の後にㅌが直接接続していることがわかる。ただ㉙" III. ㅌけが 4. 1. ㅌあげた I. b の型でㅌ他はすべて I. a の型である。

[資料 4] 『隣語大方』

ㅌこで使用する資料は、『訂正隣語大方』と『アストン本』である。

以下、それぞれ I. II. の記号で表示する。

- ④⑧ I. 1. 6b 녁스계서는 관중총집으로 계시니 당신께 가서 곤청할 밋게는 슈 업스오니
領事サマハ 館中ノ司デ^ニ在マスヨリ アノカニ 往テ ネコ^ニ 頼ミ申ス外ハシカタハア
リマセヌ
- ④⑨ I. 2. 4a 대슈리를 허실 싹새는 슈가 업스오리
大修理ヲ ナサル外ニ イタシウハ アリマスイ
- ⑤⑩ I. 7. 3a 주인의게 실례가 되매 츠물 밋게는 업스오
主人ニ失敬ニナル故 コラエル外ハコ^ニザ^リマセヌ
- ⑤⑩' II. 4. 5a 主人의게 失礼가 되매 忍辱을 할 밋근 할일 업사와
テישュニ ブレイニナリマスルユエ ハジ^ヲ コラエルヨリ 外ノコトハコサリマセヌ

『隣語大方』には 4. 1. であげた I. の型の a. b 両方の形が現れていることがわかるが、⑤⑩' の例文で動詞連体形に直接밋근が接続した後、슈 업다ではなく할일 업다(仕様がな)の形が続いているのが注目される。つまり、밖에の後続く形は一通りではなく없다, 슈(가)없다, 할일 없다などの言い方があったということである。このことは、現代朝鮮語の「可能表現」において、ㄷ/을 수 있다(없다)と言われる表現が、古くㄷ/을 길이 있다(없다) (～する道がある(ない)) ㄷ/을 수단이 있다(없다) (～する手段がある(ない)) など複数の表現で言われていたことと一脈通じるところがある。⁸

〔資料5〕『日本人之朝鮮語独学全』朴重華

- ⑤① 리해득실은 운수에 못칠 수 밋게는 업는 일이니 p321
利害得失ハ 運ニ任カス外ハナゲ^ニスヲ
- ⑤② 그 책임은 역시 교육가의 덕행의 부족한데 도라보낼 수 밋게 업는 일로
생각하오 p384
其ノ責任ハ 矢張り教育家ノ 德行ノ足ラ^ニニ 帰セシムル外ハ カラウト思ヒマス
- ⑤③ 로쇠하야 죽는 것은 혹은 턴영에 도라보낼 수 밋게는 업다고
말하겠는지도 모르나 p404
老衰シ死セリノハ 或ハ 天命ニ帰セシムル 外ハ 無仆云ヘルカモ知レマセンカ^ニ

⁸ 可能表現については、改めて論じたいが、中期朝鮮語では、否定・禁止の表現は固定していたのに対して、その逆に関しては、助動詞 겠, 되다, ㄷ/을 만하다や上にあげた複数の表し方が存在し、一定していなかったことがわかる。

この資料には、4. 1. であげた II. の型しか現れていないことがわかる。

念のためと思い、『漂民対話』を調べてみたところ、関連のある例文が2例発見できたので最後にあげておきたい。いずれも I. a. の型である。

㉔ 京/上 37a 새로 머히고 꺾 밧긔 업것다

アラタニ キラセテ カスハハ ナ

㉕ 京/39a 結縛하여 드러들 밧긔 업고

シバツテ イレテ オク 外ハ ナ

5. 結語

以上、日本語の「～する外（ほか）ない」に対する朝鮮語の表現について検討してきた。まず、밖에を論じるに際し、動詞の語幹に기를付け名詞化して接続する 때문, 전を例にとり、これらが明治・大正以前は動詞の連体形に接続していたことを明らかにした上で、밖에도動詞の連体形に接続していたことを示した。

さらに、この밖에 に関し、現代語で一般に使われている「은/을 수 밖에 없다」という形以外にも、「은/을 밖에 없다」「은/을 밖에 수(가) 없다」という形が存在していたこと、また、これらを通時論的に見ると、『捷解新語』『交隣須知』『隣語大方』などに後者の二つの形しか見られないことから、後者の二つの形のほうがより古いものであるらしいことなどを指摘した。

元来が自立名詞であった 밖(外)が 은/을 밖에 없다という形で「～するしかない」という意味を表すに至り、次第に自立性を失い全体で一まとまりとなって機能するようになり、ちょうど助動詞のような役割を果たすことになったと思われる。一方、은/을 밖에 수(가) 없다のほうは、未来連体形은/을 と밖에の結びつきは一つのまとまりをなしていたが、その後続く는 には未だ{すべ・手段}という意味が残っており、意味上二つに分けられるのではないかと思われる。

他方、4. 1. の II. にあげた 은/을 と 밖에の間に 는が入った型については、新たに出現したものと考えられるが、なぜ I. の型がありながら、는を入れることによって II. の型を生み出したのかについては、残念ながら、現在のところよくわからない。

ところで、論文を書く際、たまたま読んだ李光洙『無情』の翻訳書 p266 に「また僧になるほか道がないような気もする」という文を見つけた。その訳文に対応する原文がどのようなになっているかを訳者の新潟県立大学名誉教授の波田野節子氏にお聞きしたところ、次のような回答を得た。「또 중 될 것 밖에 더 길이 없는 것도 갓다」

この表現はいわば、「僧になること以外に道がないようでもある」とでも訳せそうな表現である。

この作品は1918年（大正7年）に刊行されたものだが、**佇**ではなく**佇**が使われている点で注目されるが、いずれも形式名詞であるという点で共通性があると言える。

それにしても、I.の型があるにも拘わらず、形式名詞を介在させてII.の型を新らに生じさせる何か特別な理由があったのであろうか。

ちなみに、KAIST Concordance Program「한국어 용례 색인」に**佇**を入力すると203の例文が現れるが、動詞連体形に接続する例も少なくない。**佇**の9804個の例文に比べれば数は少ないものの、貴重なものではないかと思われる。

いずれにしても、I.の型のほうがII.の型よりも古いものであるということをも前提にしたうえで、議論を進める必要があるのではないかと思う。

【参考文献】

- 『三本対照 捷解新語 本文篇』（1972）京都大学文学部国語国文学研究室編
『重刊捷解新語』（1990）弘文閣
『交隣須知』明治14年版(1881) 福島邦道・岡上登喜男編 笠間書院
『交隣須知』明治16年版(1883) 白石氏蔵版 国立国会図書館デジタルコレクション（国図デジ）
『訂正隣語大方』明治15年版(1882) 外務省蔵版 浦瀬裕校正増補（国図デジ）
『隣語大方』（2005）アストン文庫所蔵 不二文化
近藤信一(1906) 『韓語正規』金沢庄三郎関
国分国夫(1908) 『日韓通話』 国分象太郎校正 柳必根・朴斎尚関
前間恭作(1909) 『韓語通』京都大学文学部国語国文学研究室編
高橋亨(1909) 『韓語文典』
伊藤伊吉(1910) 李명호関『訂正増補 独習韓語大成』
朴重華(1928) 『日本人の朝鮮語独学』
최현배(1971) 『우리말본』 정음사
『연세 현대한국어사전』(2006)
加藤重弘(2006) 『日本語文法入門ハンドブック』 研究社
KAIST Concordance Program「한국어 용례 색인」